

## 短歌ブームって本当にブーム？ 高山邦男

「短歌ブーム」というワードが当たり前のように溢れていて、よく口にされている人がいる。確かにそう呼ばれる事象のようなものがあるのだと思うが、SNSという顔の見えない世界に蜚語のように揺らめいている世界のもので何か判然としない。それってどういう短歌なのか、どう理解していいのか分からない人は多いのではないかと思う。そこで、私のような既存の短歌界の結社側の人からどう捉えたらいいのかを考えてみたい。

二〇二三年三月十四日（火）に放送されたNHKクローズアップ現代では「短歌ブーム」が取り上げられている。その冒頭では次のように紹介されている。

一体なぜ？いま空前の短歌ブームが起きています。ヒット歌集が次々と誕生し、各地の短歌イベントは大盛況。けん引するのは20〜30代の若い世代です。

「空前のブーム」で「ヒット歌集が次々と誕生」。私の知らないところですがいいことが起こっているようである。ただ、ブームの中心人物の岡本真帆さんは次のようなことを述べている。

短歌の存在によって自分たちの記憶の話とか、私はこう思うってという考えの共有ができる。こういうことあったよねって、ちよつと笑いあえるおかしい瞬間とか、そういうものを人と分かち合えたほうがうれいな。

短歌の文学性とか伝統ではなくコミュニケーションツールの延長

上に短歌を見ているように思える。また、短歌ブームとはSNSでの共感、いわゆる「いいね」の広がりという姿が見えてくる。この状況を読み解く切り口として、佐佐木幸綱の「短歌の現在」138、「素人の時代」(上)(下)に注目した。詳しくは一九九一年十一月号十二月号を。また、それに関連して本号「ほろ酔いインタビュー第23回」を見ていただきたい。

大雑把に要約すると、短歌史として素人を求めた素人の時代が二回あり、一度目は明治時代の「和歌革新運動期」。二度目は戦後のいわゆる第二芸術論と短歌否定論によってもたらされた時代。そして、この文章が書かれた一九九一年時点を第三の「素人の時代」と規定する。そして、次のように結論する。

このままでは、まず、歌人がいなくなる。しばらくは素人が集まって短歌を作りつづけるだろうが、ほどなく、つまらなくなつてやめてしまうだろう。素人の短歌が面白いのは、アンチテーゼとしての役割を負っているときだけだからである。

三十年前に佐佐木幸綱が予言した結論がそのまま現在の状況に当てはまることに驚く。素人は技巧的には玄人に勝ることはなく、短歌史的には「アンチテーゼ」があつてこそ価値があるのだ。ほんとうにあたしでいいの？ずばらだし、傘もこんなにたくさんあるし 岡本 真帆

短歌ブームの岡本さんの代表作である。場面があり気持ちがあり、いい歌だと思う。ただ、現在の歌壇に対して反措定となりうるような力があるかと言えはどうか。とは言え、今はそういう時代なのだ。良質な叙情こそが匍匐前進でも、明日につながる動力であり希望であると私は思う。